

独自ノイキャン×ビーム技術を応用

耳を塞がずに、

ボーズから耳を塞がないオープンイヤー型イヤホンのド本命が登場する。

耳を挟むように装着するイヤークラフ型で、ボーズ独自のノイキャン技術やビーム技術が凝縮されて搭載されている。

ガジェットファンならそれだけでもワクワクしてこないだろうか？

本誌は幸運にもいち早く本機を試すことができたので、ファーストインプレッションをお届けしたい。

文／山本 敦 Atsushi Yamamoto 写真／田代法生

耳に挟むように装着
長時間使っても快適！



驚きのサウンド

快適に装着するために小さいが、音は一切妥協しない!

耳を塞がないオープンタイプのワイヤレスイヤホンが元気だ。このたび老舗のボーズがついに、このカテゴリーに本格参入。独自技術を惜しみなく載せて、通常のカナル型イヤホンのように濃厚なサウンドが楽しめる新製品「Bose Ultra Open Earbuds」を発売する。製品を発表する前に革新的なワイヤレスイヤホンをいち早く体験できたので、さっそく詳細をレポートしよう。

Bose Ultra Open Earbuds(以下:ボーズ UOE)は装着スタイルがとてもユニークだ。音の出口となるノズルを耳穴に挿入するのではなく、C型の本体を両耳に挟み込むように固定する。ファッションアイテムのイヤークラスみたいな着心地を想像してほしい。

サウンドはどのように聴こえてくるのか? ボーズ UOEはいわゆる骨伝導方式のイヤホンではない。超コンパクトなスピーカーを耳穴に近接させて、空気振動から生まれる音を聴く。今では同じ空気伝導方式を採用するイヤホンも珍しくないが、ボーズ UOEはオープン型なのに“音漏れ”が極端に少ないのだ。その秘密を解く鍵はボーズ独自の「OpenAudioテクノロジー」にある。

まずはイヤホンのデザインを俯瞰しよう。本体は独自形状のドライバーを内蔵するスピーカー部と、システムICチップにバッテリーなどを内蔵するバレル(樽)部にわかれ、それぞれを柔軟に伸縮するFlexバンドがつないでいる。バンドは縮んだ形状を記憶しており、耳の前側にスピーカー部、後側にバレル部を向けて耳に挟み込む

ように装着する。イヤホンは耳に対して約45度の角度に向けられれば理想的だが、耳の形は人それぞれに違う。ゆえに45度の位置を基準として上下に少しずつスライドさせながら、フィット感と音の聴こえ方が最も安定する位置に着ければよいだろう。片側イヤホンの質量は約6.5g。筆者は数時間以上着ければなしにしても痛みを感じなかった。

個性的なデザインのイヤホンに耳にしっかりとフィットさせたら、今度はボーズのOpenAudioテクノロジーが真価を発揮する番だ。この技術のポイントは大きく2点ある。スピーカー部に設けられた2箇所のスリットに注目してほしい。

耳にイヤホンを着けた状態で、耳穴に正対する側のスリットから主に中高域の音が出る。音楽や音声通話のキモとなる音の成分に指向性を持たせて、耳の奥にまでストレートに送り届ける。さらにイヤホンのスピーカー部の上側にある細長いスリットからは、低音域と音漏れを抑制する逆位相の音が同時に出力される。高域から低域まで全体に音のバランスを最適化しながら、よほどイヤホンに耳を近づけなければわからないほど、音漏れを強力に抑える。エネルギーを消費しながら、音漏れを防ぐ。ボーズによる独自技術の複合体がOpenAudioテクノロジーの正体だ。

次ページからはボーズの新顔についてさらに解説を加えながら、筆者の音質や装着性に関するインプレッションを報告しよう。

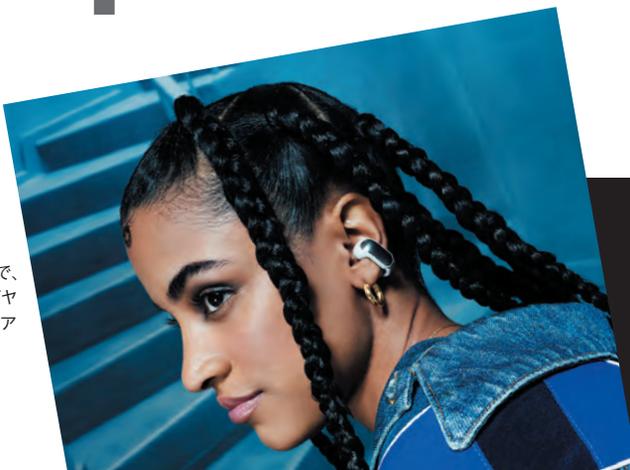
オープンイヤー型完全ワイヤレスイヤホン

Bose Ultra Open Earbuds

¥39,600(税込) ▶投票 No.113

SPEC ●通信方式:Bluetooth Ver.5.3
●対応コーデック:SBC、AAC、aptX、aptX Adaptive ●ドライバー口径:非公認 ●連続再生時間:最大7.5時間※(ケース込み最大27時間) ●質量:6.5g(イヤホン片耳)、44g(ケース部) ●付属品:充電ケーブル
※ボーズでテストを実施(音量75 dB SPLでオーディオ再生した場合)。バッテリー寿命は、設定や使用状況によって異なります。

本機は耳を塞がないイヤホンで、耳に引っ掛けるように装着するイヤークラスタイプを採用する。まるでアウエーのようなルックスだ。



次ページは
実際に使ってみた
インプレッションを
詳解!

First Impression 「音」

深い低音、バランスのよさが光る

音の実体感があり熱量を感じさせる

ボーズ UOE はクアルコムの Snapdragon Sound に対応する。aptX Adaptive コーデックを選択すると最大 48kHz/24bit の高品質なサウンドが楽しめる。もちろん iPhone、iPad によるベストなリスニング体験を引き出す AAC コーデックのサポートにも抜かりはない。

スマートフォンにつないで音楽を再生した。とても色濃く肉厚なサウンドだ。ベースのリズムが鋭く力強い。カフェや商業施設、電車の中など様々な場所で試してみても音楽が薄まることがない。ボーカルや楽器の音像は実体感がとても豊かだ。熱量も高い。

Bose イマーシブオーディオにも対応する。先行する Ultra シリーズの ANC ヘッドホン・イヤホンから搭載がはじまった、ボーズ独自の空間オーディオ体験だ。完全に開放されたイヤホンの構造にも最適化した Bose イマーシブオーディオは、思わず息をのむほどに鮮やかな音場を描いてみせた。耳を塞がないスタイルなので、特に高さ方向に広がる音の開放感が心地よかった。静かな環境で聴くクラシックのオーケストラ、ポップスのライブ録音の演奏などをボーズ UOE で聴くと、他のイヤホンでは味わえない臨場感に触れられるだろう。

ココがポイント①

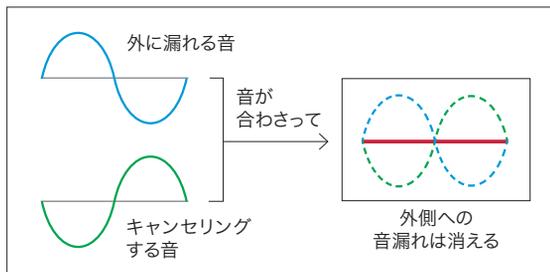
ビーム技術を応用した再生方法



ボーズ UOE の再生音は中高域と低域とが別々に出されている。中高域は写真左下の大きめの孔から出るが、強い指向性を持たせるために内部では特殊な構造を採用する。ホースの先を掴むと水圧が強くなるように、音の通り道を工夫しているという。これはサウンドバーで培った「PhaseGuide 技術」が応用されている。

ココがポイント②

ANCと同じ原理で音漏れを低減



指向性がある中高域の音はそもそも音漏れしにくい、低域は無指向性のため音漏れしやすい。そこでボーズは音漏れしやすい低域成分とその逆位相の音も同時に放出することで、ほとんど音漏れを感じないイヤホンを完成させた。このアルゴリズムの計算などに、ボーズのノイズキャンセリング技術が活かされている。

ココがポイント③

独自イマーシブサウンドに対応



2023 年秋に登場した「QuietComfort Ultra Earbuds」で初採用された「ボーズイマーシブオーディオ」がボーズ UOE でも採用されており、オープンタイプならではの音場再生ができるように独自設計されているという。アプリで音の定位を眼前に固定する「静止」と動かす「移動」とを選択できる。

Column | 「耳を塞がない」に挑戦し続けているボーズ

ボーズによる“耳を塞がない”ポータブルオーディオは本機が初めての製品ではない。2017年には肩に乗せて使う「Sound wear Companion Speaker」がアメリカで発売された。いわゆる“オーディオサングラス”として親しまれる「Bose Frames」は2世代に渡り展開する。それぞれの開発過程で蓄積したオープン型オーディオの高音質化技術と、音漏れの抑制に関してはボーズが得意とするアクティブ・ノイズキャンセリングヘッドホンの知見が合わさり、ボーズ UOE の根幹を成している。だからこそ本機はひと味も、ふた味も違うのだ。



「Bose Soundwear Companion Speaker」



「Bose Frames」

First Impression 「装着性」

イヤークフのように耳に着ける

人間工学に基づく設計だから疲れない

ボーズ UOE は、耳の外側にクリップする独自の装着スタイルなので、耳が痛くなりそうだと思うかもしれない。だがそれは杞憂だ。というのもボーズは「Aviation Headset」という航空機パイロット用のノイズキャンセリングヘッドセットを1989年に世界で初めて開発したメーカー。長時間のフライトでも快適に過ごせるように何十年も前から人間工学を研究し続けている。ボーズ UOE でもその快適設計は活かされており、数時間使ったくらいでは痛みなど感じないし、装着している感覚も徐々になくなってくる。

また「ボーズ・イマージブオーディオ」をオンにして使う際には、アプリから「イマージブオーディオの調整」を済ませておきたい。ユーザー各自の心地よく感じる装着状態に合わせて、イヤホンが内蔵するジャイロセンサーによりヘッドトラッキング機能の動作も含めてイマージブオーディオ再生を最適化してくれる。

ココがポイント④

ドライバーを耳孔に向ける



① 形状から装着方法がよくわからないかもしれないが、ドライバー部とバルブ部をつなぐ「Flexバンド」が動く仕様だ。このバンドは形状記憶しているが、ボーズの厳しいテストをクリアした高耐久性のシリコン素材を採用しているので、グイッと動かしても問題ない。② バルブ部が耳裏になるように装着する。③ 自分では確認が難しいが、中高域を再生するドライバー孔が、耳孔に向くように装着するのが理想的な装着方法だ。

First Impression 「アプリの拡張性」

操作やEQを自分色に調整できる

自動で音量調整する機能も搭載

モバイルアプリの「Bose Music」を使って、ボーズ UOE をさらに自分好みに追いつめ込むこともできる。まず左耳のボタンはショートカットボタンになっており、イマージブオーディオの切り替えや音声アシスタントのウェイクアップなどを割り振ることができる。ほかにもサウンドにアクセントを効かせるオーディオコライザーを搭載するほか、便利なのは「Auto Volume」機能。アプリでON/OFFできるが、これは周囲の環境ノイズの大きさにあわせて、イヤホンの再生音量を自動で適切になるように調整してくれるもの。意識しないでも常に適正なボリュームで音楽を楽しむことができる。今後、アプリのアップデートも期待できる実力派イヤホンだ。



Check

ながら聴きに最適な機能性も見逃せない!

① ロングライフバッテリー



「ながら聴き」で使用したいオープンイヤータイプだから、バッテリーは長持ちの方が嬉しい。ボーズ UOE はイヤホン単体で最大7.5時間(※)の再生。ケース込みで最大27時間も利用できる。これなら一日中使える!

② サウンドバーとも繋がる



ボーズのサウンドバーに搭載される「Bose Simple Sync」に対応し、サウンドバーとイヤホンの両方から音が再生できる。リビングでサウンドバーを使い、キッチンで料理しながらボーズ UOE を使う、といったシーンでも活躍するだろう!